

2024. 11. 30

No.242

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

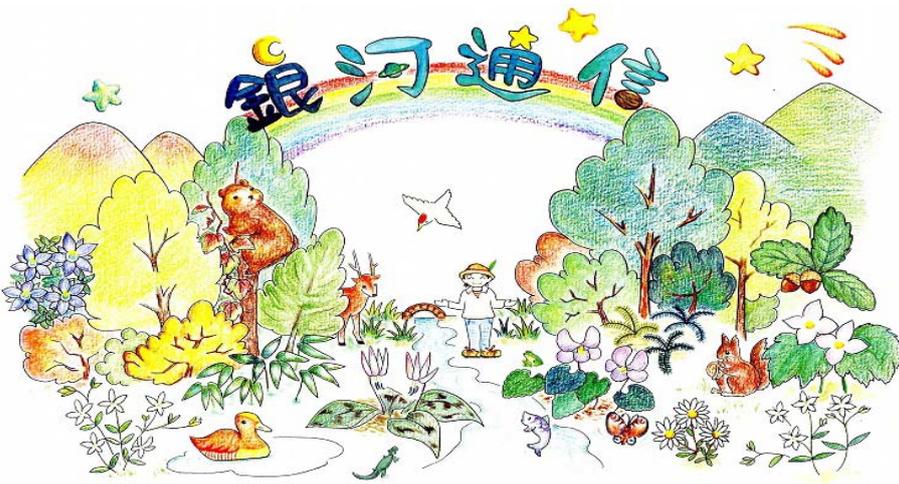
minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送年間2,000円)



## 2024年を振り返っておおらず比ばず平気で生きたい（樹木希林さんの言葉）

本州は季節外れの暑さというニュースに驚きました。北海道は一気に雪が降り、雪かきの心配が増えました。秋の紅葉を楽しむ期間は少なかったように思います。

10月、衆議院議員選挙がありました。投票率が53.85%と低かったのが残念です。マスメディアで私たちが選ぶ判断をする情報が少なかったですね。裏



金問題が解決していないのに、裏金非公認候補に2千万円を支給したことを共産党が明らかにしました。自民党は惨敗しましたが、立憲民主党は、野党共闘にもっと力を入れてほしかったです。私は市民の味方に投票したいといつも思っています。

戦争の惨禍が今年も終息していません。パレスチナ、ウクライナ、あまり新聞では報じられませんがミャンマーでも無残に命が失われていく子どもたちに心を痛めています。そんな状況で日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）がノーベル平和賞受賞が嬉しかったです。核兵器のない世界をめざす努力と、核兵器が二度と使われてはならないと体験者が訴え続けてきた努力が実りました。全世界にこの声が届くことに期待します。

2021年のクリスマスにクリスチャンになりました。聖書もしっかり読んでいないのに、ミサだけは用事や、体調が悪い時以外は教会に行き、神父のお話を聞きみなさんと世界の平和を祈っています。「戦争をやめて」とデモに参加することはとても大事です。でもミサでみなさんと心を合わせて、辛い思いをしている子どもたちや女性に思いを馳せることもデモと同じ行動だと思ふようになりました。

12月1日は夫が亡くなって一周忌になります。天国から私と息子を見守ってくれているのでしょうか？定年退職後、数年は頑張って、再雇用で働きました。その頃に、若い時からの夢だった天文台を自宅に作りました。その当時の嬉しさいっばいの笑顔を忘れることができません。近所の子どもたちや札幌市内や遠方から観にきてくださったことを思い出します。5月ごろから、無料で譲るので活用してくださる団体を探していましたが、北海道情報大学で宇宙開発研究会（宇宙研）があることがきっかけになり、活用していただけることになりました。先日大きな天体望遠鏡を解体して大学に運びました。天文ドームは来年、雪解けを待って設置することになりました。夫が、何年もかかって、巨大な望遠鏡や設置台、さまざまな部品などを買って集めていました。それを組み立てたのも夫でした。学生や教職員に星の観測をしてもらえることを、夫は喜んでいると思います。

11月12日、毎日新聞道内版で36年間発行してきた「銀河通信」が「安心できる地球 後世に」と紹介されました。記事・写真は片野裕之さん。 <http://www13.plala.or.jp/minginga/> から読めますのでご覧ください。印刷通信読者にはコピーして同封します。

静岡地検の山田英夫検事正が11月27日に袴田巖さんと姉の秀子さんに直接会って謝罪しました。でも再審無罪が確定した時の畝本直美検事総長の発言には怒りを覚えました。

談話の一部を紹介します。

「到底承服できないものであり、控訴して上級審の判断を仰ぐべき内容であると思われまして」とは、つまり「犯人は袴田さん」と主張しているということです。58年間も冤罪で苦しんだ袴田さん。今号で袴田さんの真実を取材した本や映画も紹介しました。

闇バイトの誘いに乗って、悪質な犯罪が増えています。見知らぬ人から電話があると思わず見構える私があります。江別では防犯カメラの設置を呼び掛けているとの情報で、我が家も設置しようと思っています。（樋口みな子）



毎日新聞に掲載された写真

## 「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ 伝言館」(福島県檜葉町)訪問記

福原正和

福島県に住む孫を小樽フェリー・新潟経由で送り届けた後、女房と一緒に福島県檜葉町の「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」(以下「伝言館」)を訪ねました。

原子力の専門家として数十年前から原発の危険性を指摘してきた安齋育郎氏(立命館大学名誉教授、同大学国際平和ミュージアム終身名誉館長、放射線防護学専門、「伝言館」館長)の案内もあり、是非一度訪ねたいと思っていた施設です。

元々「伝言館」を作ったのは、檜葉町に室町時代から続く古刹宝鏡寺の故早川篤雄住職。NHK「こころの時代」にも取り上げられ、福島第二原発が作られる時反対運動を始め、17年間の法廷闘争など一昨年83歳で亡くなるまで原発反対の運動に生涯を捧げた方です。

住職の仕事と同時に農家として米を育て、自ら運営する障がい者施設に提供もされていました。

境内には広島原爆投下後採火した「非核の火」が灯されています。その火は広島原爆投下後市内でくすぶっていた家から採火したもので、東京・上野東照宮から引き継ぐ形で宝鏡寺で現在灯されています。

大震災原発事故の避難地域となり、その補償金で事故から10年後境内に木造二階建ての「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」を作りました。



ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館と原発  
悔恨・伝言の碑(チラシからの転載)

早川住職が亡くなった後は数十年ともに活動してきた安齋育郎氏が館長を引継ぎ、京都から月一回往復13時間かけて「伝言館」に通っています。

私達が「伝言館」に伺った時は、安齋育郎氏は不在でしたが、女性の丹治事務局長にお話を伺う事が出来ました。丹治さんは避難した近隣先から1~2時間かけて通い、説明・管理などをされ、最近では外国の学生さんなども来られるとのこと。

原発事故被害の説明の後、丹治さんは心配なことをいくつか話されていました。まず「伝言館」は早川住職が私金を投じて造りましたが、土地は宗教法人のもので、将来は分からないこと。現在の住職さんは継承を認めてくれています。安齋館長にしても、丹治事務局長にしても全てボランティアで、「伝言館」運営は皆さんからの募金のみで運営していること。お二人ともご高齢や病気で後継者問題も。

東電や官公立の数億円(以上?)かけた「廃炉資料館」や「伝承館」はありますが、被害を受けた住民の立場では必ずしもなく、仙台でもらった「東北地方観光ガイド」には原発の位置さえ記載がありませんでした。この様な状況の中「原発悔恨・伝言の碑」の建つこの「伝言館」の存在は貴重です。

皆さまに是非一度訪問されることをお薦め致します。(北海道反核医師・歯科医師の会)

以下碑文

### 原発悔恨・伝言の碑

電力企業と国家の傲岸に  
立ち向かって40年 力及ばず  
原発は本性を剥き出し  
ふるさとの過去・現在・未来を奪った

人々に伝えたい 感性を研ぎ澄まし  
知恵をふり絞り 力を結び合わせて  
不条理に立ち向かう勇気を!  
科学と命への限りない愛の力で!

2021年3月11日

早川篤雄 安齋育郎

### 聖フランシスコの帰天祭に参加 して

佐久間明美

カトリック北11条教会(札幌)にて10月3日、18時30分から執り行われました、聖フランシスコの帰天祭の典礼(トランジトゥス)に、初めて参列しました。フランシスコ会の神父様たちや在世フランシスコ会の方々、一般信徒の方々などのべ40人ほどが聖フランシスコを愛する人々と共に祈りを捧げました。そして、ありがたいことに次の日のフランシスコの記念ミサにも賜ることが出来ました。両日通して参加することで、フランシスコ会が大切にしている愛の精神も体感でき素晴らしい体験でした。

### 聖フランシスコとトランジトゥスについて

聖フランシスコ(1181~1226)はイタリアのアッシジで生まれ、清貧と奉仕の生活を実践しながら、愛を実践したキリスト教の聖人です。

トランジトゥスとは、移行と言う意味で、フランシスコが、この世から天国へ移ったことを記念します。10月4日はフランシスコの天国での誕生を記念して聖フランシスコの祭日として祝います。3日から4日にかけての一連の典礼は、闇から光への移行、つまり過越(すぎこし)を典礼的に表現しています。トランジトゥスでは、詩編とともにフランシスコの太陽の賛歌を唱和し、遺言かフランシスコの死の場面を記した伝記を、朗読しながらフランシスコへの崇敬が行われます。

以前から行ってみたいと思っていたのですが、フランシスコが一度この世で亡くなり、その後天国に召されていく神秘。実際に参列して身に染みるように感じる事ができ本当に素晴らしい時間でした。自然と平和を愛した聖フランシスコを偲ぶことで今の時代にも思いを馳せる尊き機会ともなりました。

キリスト教を超えて広く親しまれている聖フランシスコ。神と共に生き、人と自然をこよなく愛したその精神は、現代社会へも続く普遍性があり、今に生きる私たちにもいろいろなものを教えてくれます。宇宙や地球の尊さ、大地や風や太陽や樹木や動物や人々の素晴らしさ、それは彼の「太陽の賛歌」

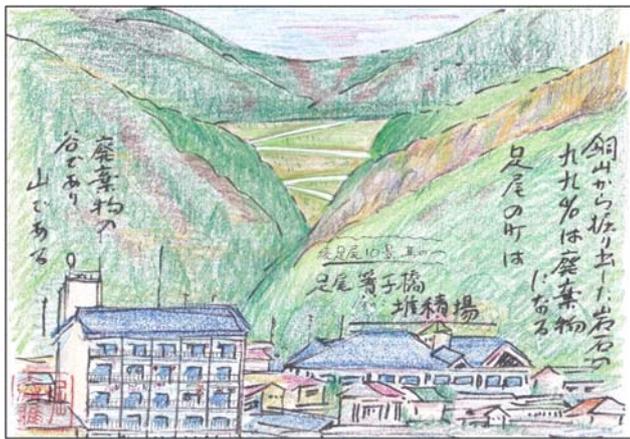
にも記されています。いつもは生活や現実の世界の状況に右往左往する中で、いつの時代も大切な普遍的なものを思い起こされる尊い時間でした。

最後に「太陽の賛歌」の一節をご紹介しますいただきます。

賛美されますように、わたしの主よ  
兄弟である風によって  
また、大気と雲と晴天とすべての季節によって  
これを通して、あなたはすべての造られたものの上に  
支えを与えてくださいます

## 足尾銅山閉山から51年 足尾の今を知る 堀 泰雄

2024年11月16日(土)、「足尾鉍毒事件と田中正造を学ぶ会」(群馬県前橋市)主催で、「足尾銅山閉山から51年 足尾の今を知る」バス・ツアーが行われ、群馬県から30人が参加し、足尾では、地元の共産党の方々などが10人ほど出迎えてくれました。



廃棄物の谷と山 絵・堀泰雄

足尾銅山というと、すぐに「足尾鉍毒事件」を思い浮かべます。足尾鉍毒事件に関心のある方は多く、銅山からの鉍毒で廃村に追い込まれた谷中村やそこに作られた渡良瀬遊水地を訪れた人は多いのですが、肝心の日光市足尾町内を訪ねた人は少ないのです。観光客は、わたらせ渓谷鉄道で景色を楽しみ、足尾町内の観光施設「足尾銅山観光」を訪問して、町の中は素通りなのです。しかし、その町中にこそ、日本の近代化遺産が残り、最盛時には38000人が住んでいたその暮らしの跡が残っていて、興味が尽きません。そんな、町中の魅力を知ってほしいと、今回のバス・ツアーを企画しました。



足尾鉍山の跡地見学

訪問先は、まず足尾・小滝地区です。ここには足尾の3大坑口の一つ、小滝坑があり、小滝地区には100年前には1万人が住んでいましたが、今は住民はゼロ、谷を埋めて作った鉍山施設や長屋の石垣だけが残っています。今回は、中国人殉難烈士記念塔、銀山平住宅地跡、朝鮮人強制連行犠牲者慰霊碑を先ず訪問。ここでは、強制連行された中国人や朝鮮人が過酷な監督の下で働かされ、多くが命を落としたのです。

また小滝小学校の跡地も訪問しました。往時は1300人が学んでいたという学校の跡地には、コンクリートの土台だけが残り、金属回収令で鉄砲玉になった二宮金次郎の台座だけが残っています。まばらに木が生えた跡地に、参加者は、深く感動したようでした。



林となった旧小滝小学校

ついで、観光施設「銅山観光」を訪問しました。銅山閉鎖後も何とか町を発展させようと、1980年4月、足尾町によって作られた観光施設で、トロッコで昔の通洞坑を150メートル入り、そこから坑夫の人形が、江戸時代から閉山までの採掘のようすを教えてくれます。参加者は、大いに興味を惹かれたようで、ずいぶん時間を取って細かく見学していました。昼食はお弁当で、これは町の女性たちが作ってくれたもの。そしてけんちん汁は、共産党の支部の方々を作ってくれました。

昼食を食べながら、上岡健司さんから、町の中心部の渋川上流に作られた箕の子橋ダムの危険性の説明を受けました。このダム(堆積場)は、1960年に完成。その当時町民は歓迎したそうですが鉍毒水の中和過程で出る石灰岩の鉍泥を、水を含んだまま今も溜め続けているので、どんどん巨大になり、万が一ダムが決壊すれば、足尾町中心部は潰滅、下流の草木ダム(群馬県みどり市)に流れ込めば、それを水源としている桐生市は飲み水がなくなります。そのようなことから、上岡さんらは「すのこ橋ダム安全対策協議会」を結成し、ダムの見学会や古河との交渉を続けています。「足尾銅山は閉山したから鉍毒問題も終わった」と多くは信じていますが、銅山からは今も鉍毒水が流れ出て、古河はそれを永遠に中和し続けなければならないのです。古河が出来なくなったら、今度は税金でやらなければならないのですから、本当に空恐ろしいことです。

午後からは、足尾町から更に山を登ったところにある旧・松木村跡へ行きました。松木村は、足尾の銅の精錬で出る煙害で住めなくなり、1902年に4万円の賠償金と引き換えに村人は村を去り、廃村になりました。煙害で昔は赤銅色のはげ山でしたが、今ではすっかり緑が戻りました。この緑化作業には、地元の主婦たち、その後は全国からのボランティアが参加して行われましたがそのためのお金は古河は出さず国の予算(我々の税金)で行われたというのです。これは福島原発事故の復旧を国の予算で行っているのと同じ構図です。ここで説明は、地元共産党の元・町議藤井豊さんが行いました。その後、古河橋で小休止して、古河橋、製錬所、近所の廃屋などを見て、更に下流の下の平住宅跡で、残っている長屋、半壊の公共浴場、共同便所などを見て当時の労働者の生活を想像しました。

今の足尾を見ながら、日本が歩んできた道、またこれからの道などに思いを馳せられる貴重な、有意義なバス・ツアーでした。(写真・黒崎晴夫)

## お薦め本 戦争や闘争の美化が何をもたらすのかを問う



### 映画のなかの自衛隊 防衛省のメディア広報戦略

須藤瑤子著 大月書店 2,640円



1964年に公開された映画「今日もわれ大空にあり」は新鋭戦闘機のパイロットを目指す自衛隊の若者たちを描いた青春サクセスストーリーであった。この映画で初めて航空自衛隊の全面的な撮影協力が行われ、以後、自衛隊の映画製作への協力は基準も明確になり、今日に至るまで60年間にわたって数々の作品を残してきている。著者は豊富な資料を駆使してその道筋をたどり、自衛隊の協力による映画製作の様々な側面を明示している。

映画の製作における自衛隊協力とは「諸物品」の便宜供与、および人員の行動所作の指導などであり、「諸物品」の中にはヘリコプター、戦車、戦闘機、イージス艦などまでが含まれている。これらの協力はすべて自衛隊の広報の一環として無償で提供される。しかし、実態としてはこれらの映画は「民間の娯楽商品」の性格が強く、「自衛隊のプロパガンダ」との一律的な批判は当たらない。収益を目指す映画会社が自衛隊を利用しているのであり、またそのような映画に多くの人々が足を運んでいるのが現実の姿と著者は指摘する。映画会社にしてみれば自衛隊の協力による予算削減が可能であり、また「諸物品」の活用で人目を惹く印象的なシーンの撮影が可能になるため、協力作品が次々に生まれることになる。なお、在日米軍は撮影協力についてはすべての費用を映画会社に請求するとのこと。

本書では60年間にわたる自衛隊の協力映画がジャンル別の各章で分析されているが、その並びを見ると記憶が呼び覚まされ、自衛隊協力の様々な姿が浮かび上がってくる。パイロットなどが主人公で航空自衛隊が協力する「航空映画」、ゴジラ、ガメラなどとの戦いが描かれる「怪獣映画」、『日本沈没』などに代表される「災害映画」。『亡国のイージス』などに代表される「テロ映画」、『さけ わだつみの声 Last Friends』、『男たちの大和/YAMATO』などに代表される「戦争映画」、『沈黙の艦隊』などに代表される「マンガ原作の映画」、『ガールズ&パンツァー』のように萌えキャラとミリタリーを結合させた「萌えミリ作品」、などなどがある。

中には自衛隊が協力を拒否した事例もあり、目立つのは1979年の「戦国自衛隊」への非協力である。戦国時代にタイムスリップした自衛隊が主役の映画であったが、自衛隊員同士の殺傷や隊員による女性のレイプなどのシーンがあり、自衛隊の協力は得られなかった。そのため制作会社の角川映画は自前で61式戦車に見える車両を約8000万円かけて製造した。1979年当時の8000万円は莫大な負担であったと考えられ自衛隊協力の重要さがここからも推察できる。

ハイテク兵器や派手な戦闘シーン、英雄的な行動などは映画製作の上で、観衆を引き寄せる有力な素材であり、そうした原理を踏まえて映画会社は企画を

立て、そこに無償で便宜供与する自衛隊が介在する。結果として映像文化の世界に兵器、戦争などが重要な要素として入り込んでくる。本書はそのあたりの問題にかかわる基礎資料を提供し、私たちに一考を求めている。収益目的で戦争や闘争を美化した物語を自衛隊の協力を得て作品化し、世に広めている映画会社のあり方が社会に何をもたらすのか。それが問われている。(石川旺)

## 診療所の日々の臨場感が生き生きと伝わる



さいクリニックな日々  
辺境から日本を変える愉快な仲間たち

大竹進・松田耕一郎著  
あけび書房 2,420円

2000年、山田貴敏による漫画「Dr.コトー診療所」のシリーズ全280話は、累計部数1200万部を記録した大ヒット作でした。吉岡秀隆、柴咲コウなどの主演で映画化もされています。私は、テレビドラマで「Dr.コトー診療所」を観たことでその存在を知りました。映画の舞台となった「志木那島」は日本最西端・与那国島でした。

それに似た僻地診療の物語が、今度は本州最北端青森県・下北半島最北端の辺境の地・佐井村で実際に起こっています。2015年、青森県知事選挙に立候補された大竹整形外科・大竹進医師は、当選はしなかったものの、そのときの公約であった無医村解消を実現するべく「佐井村プロジェクト」を立ち上げた。青森県は、六ヶ所村再処理工場をはじめとし、プルトニウムの割合の高いフルモックス発電の大間原発建設、さらにむつ市中間貯蔵施設、東通原発など、原発・核燃銀座といわれておりこれに対する反対運動として毎夏、大間原発建設地・大間町で「大マグロック」集会・デモが開催されてきました。大竹進医師も、この「大マグロック」に参加する中で、昔むかし、北前船の材料として、貴重な桧葉の産地であった佐井村には診療所もあり、栄えていたそうですが、時代の趨勢で過疎化となり無医村となっていたことに着眼されました。そして、村役場の方の理解を得て、土地を提供して頂き、自費で診療所を建設され、2019年4月に新たに診療所がスタートしました。その「佐井村プロジェクト」の構想から、月1回の巡回診療が軌道に乗って来て、地域住民に大歓迎されている診療所の日々の臨場感が、1つの書物として発刊されました。著者は、大竹医師と巡回診療運転手・松田耕一郎さんの二人です。「急がば回れ」=「一番の近道は遠回りだった」のことわざがあります。大竹医師の佐井村医療は、高齢化と過疎に苦しむ村民の切実なニーズと深く結びついた、心温まる活動を通じて、最終的に原発・核燃ともお別れすることを住民が選挙で選ぶことへ繋がってくるように「想像」します。

漫画やテレビドラマの中から飛び出したドラマの現実化の心温まる物語をお読みください。

(高橋精巧)

## 何かが終われば始まるものがある



転がる珠玉のように

ブレイディみかこ著  
中央公論新社 1,650円

イギリス在住の著者がコロナ禍の日常とコロナ終息後の生活を描いた2021年4月から2024年3月までの記録です。今回は夫や福岡の母の病気が続き、両国を往復した日々が中心です。

つれあいのガンが見つかり治療するが、コロナも併発して生死を彷徨った時、ロックダウンで病院への見舞いも制限されました。でもスマホでどんな様子かを画面共有できたのは良かったです。亡くなった私の夫はそれもできなく、容態が急変しても面会は拒否されました。みかこさんのつれあいは回復して日常に戻ります。奇跡のようだと思いました。その間に福岡の母親の死に至るまでのエピソードもありました。

オーロラが見えるからと飛行機の窓側の席を交換してくれた青年の親切が身にしみました。世の中は、珠玉だらけ。自分が見た日常に転がっている優しく、ほっこりする、あるいは励ましてくれるそんなシーンのことだと知って、みかこさんの体験した辛さを軽減させてくれたことが、自分の体験と重なりました。母の死を覚悟しながら、眺めたオーロラは生涯忘れないと思いました。私もオーロラを見たいです。母が「さよなら」とみかこさんに声をかけたことがラスト近くで明かされます。その悲しさは私と同じでした。私自身は夫のさよならを聞けなかったのが悲しくてならない。

大学生になった息子が「母ちゃんは、物事がうまくいってないときに俄然生き生きしてくるね」の言葉はみかこさんの真骨頂だと思いました。みかこさんは夫を連合いと書きます。強固に繋がって「帯」になるより時々「合う」ぐらいの繋がりがいいという意味でしょうか。連合いの再発に胸が締め付けられました。みかこさんの体験した辛さを軽減させてくれたことが、自分の体験と重なりました。今までの、歯切れのいい、社会批判の著書も良かったけれど、一味違うブレンディさんの魅力が伝わってきました。

「始まったものには終わりがあり、何かが終われば始まるものがある」タイトルの元になった言葉は私を励ますものでした。(樋口みな子)



65万人の生活を守るための  
水路を作った

中村哲という希望  
日本国憲法を実行した男

佐高信, 高世仁著 旬報社  
1,760円

ロシアのウクライナ侵攻、イスラエルのパレスチナ侵攻。戦争は始まったらいつまで続くのかと思うほど、多くの命が奪われています。罪のない子どもたちや女性へのジェノサイドには怒りで震えます

中村哲医師の平和主義こそが私たちの希望となる。評論家・佐高信とジャーナリスト・高世仁が、「日本国憲法を実行した男」中村哲を縦横無尽に語りあったのが本書です。

中村さんは水や農業がなければ皆死んでしまうと、アフガニスタンで水路を作り、畑を作りました。人々の命を守るには生きる糧がまず必要でした。それが平和を生む、ということ、身をもって実践したのです。不毛の地と思われたアフガニスタンの荒野を緑多い土地に変え、人々が平和に暮らせる場所をつくったのです。65万人もの生活を守る為の水路を自ら作ったのです。医師でありながら、そこまで力を尽くした人を私は知りません。

国会は彼を参考人として呼び「人々が安心して食べられるようになれば治安も安定する。軍備で守るのは国であって、人々の暮らしではない」と主張しましたが、否定されました。二人の著者が「日本国憲法を実行した男」と称するのに納得しました。アフガニスタン人にとっても慕われた存在であるにもかかわらず、中村さんは凶弾に倒れました。「死んでも撃ち返すな！」を実践した人でした。

私は遅まきながら、この事件をきっかけに「ペシャワール会」に入会しました。ささやかな寄付と、毎年の中村さんらの活動が分かるカレンダーを買っています。

日本の軍拡への流れは誰のためなのか。軍需産業が潤うだけです。その膨大な軍事費を市民のために使ってほしい。物価高で、学業を続けられない人、年金の削減で暮らしていけない人々が増えています。教育、福祉、医療、いろんな分野に回してほしいです。

まず、武器を使わないでほしい。一隅を照らすためにできることはなんだろうか。「戦争はやめて」と声をあげていきましょう。中村哲さんの本は何冊か読んでいますが、亡くなった中村さんの活動を引き継ぐためにペシャワール会の会員になってください。寄付も随時できます。(樋口みな子)

獄中で失った時間は  
戻らない

袴田事件 神になるしかなかった  
男の58年

青柳雄介著 文春新書 1,210円



強盗殺人事件の犯人とされてから58

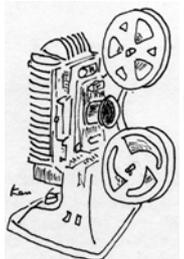
年。袴田巖さんによく無罪が決定したのは2024年9月26日。2度の再審を経ています。袴田さんが確定死刑囚のまま釈放された2014年以降の密着取材で浮かび上がる、「再審無罪」への長い闘いを検証したのが本書です。私はこの本を読む前にドキュメンタリー映画「拳と祈り 袴田巖の生涯」を観ました。(映画の欄で紹介)

袴田さんは「打たれ強い」と評された有名プロボクサーでした。一家惨殺の犯人として確たる証拠もなく重要参考人として事情聴取、そんな彼でも音を上げる苛烈な取り調べの末に逮捕、後に死刑判決を受けました。16時間も「おまえがやったんだ。白状しろ」と攻め続けたのです。

東京拘置所での日々にクリスチャンになるが神の助けはありません。あまりの苦悩に苛まれた袴田さんは、次第に自分自身を「全知全能の神」と思い込むようになります。心が壊れて自らが神に

なっていく袴田さん。著者の青柳さんは、浜松市に住まいを移して有罪のままに釈放された、袴田さんと姉の秀子さんの取材を続けました。冤罪で死刑が確定した絶望から拘禁状態で自らが神だと思うようになります。袴田さんの行動には理解ができると思うようになります。リングの中は、嘘がない世界。袴田さんがボクシングの話をするときは理路整然と語ります。無実の心証を持った1人の裁判官はそれでも死刑判決を書かねばならず生涯苦しみます。熊本典道元裁判官は「合議に1対2で敗れ心にもない判決を書いた」と告白します。この良心が生かされなかったのが残念でなりません。静岡地裁が再審決定するも、検察が特別抗告します。何故か。事態を長期化させてきた意図は、著者が書く通り鬼籍入りを待っていたのではないか。姉の秀子さんや、亡くなった母らの巖さんに寄せる愛情の深さが袴田さんを生かしたと思います。

失われた58年はあまりにもむごい。今の司法制度を変えなくては冤罪は無くならないのではないかと強く抗議したい。袴田さんが母や兄、姉、支援者に書いた手紙には知性を感じます。(1973年1月26日兄に宛てた手紙)「私も冤罪ながら死刑囚。全身にしみわたって来る悲しみにたえつつ生きなければならない。そして死刑執行という未知のものに対するはてしない恐怖が私の心をたとえようもなく冷たくする時がある。そして全身が冬の木枯におそわれたように、身をふるわせるのである。自分の五感さえ信じられないほどの恐ろしい瞬間があるのだ。しかし、私は勝つのだ。私は、今日、自分の生活に対する決意と行為が、一つなりとも卵を持って石に投げつけるに等しい無謀なものだとは思わない」(樋口みな子)



### 拳ひとつで闘った記憶が袴田さんを支えた

拳(けん)と祈り 笠井千晶監督



本の紹介を書きましたので、事件には触れません。内容は巖さんと、弟の無実を信じ支え続けた袴田ひで子さんの日々を温かく見つめたドキュメンタリー映画です。笠井千晶監督は当時静岡放送の記者になったばかりの20代でした。巖さんが家族に宛てた手紙は優しさにあふれていて、監督は「死刑囚のイメージとはまったく違った」と語っています。

カメラは再審開始決定と同時に釈放された時から写すのです。それ以前から、監督はひで子さんと親しくなった縁でひで子さん所有のマンションの1室に住んでいたそうです。22年間、巖さんと姉ひで子さんの人間性を丹念にカメラは写します。弁護団から提供された、警察の非人道的な取り調べの録音が何度か挿入されます。無実を訴え続けますが、16時間にも及ぶ拷問に近い取り調べで、自供を強要されるのです。「お前が犯人だ。自白しろ」とでっち上げる声に震え上がりました。

巖さんを支えたのはボクシングでした。国体出場で

頭角を現し、上京してプロになりました。年間19試合勝利は日本記録だとか。日本プロボクシング協会も巖さんの支援を貫きます。自白の強要で拘禁症状で妄想もあるけれど、ボクシングの仲間と話す時の生き生きとした姿が忘れられません。

ひで子さんと暮らすようになって、家でも外でも、何時間でも歩き続ける巖さん。ひで子さんは明るく笑って「自由に生きてほしいの」と心配するそぶりも見せません。私には出来そうにありません。ひで子さんの強さと明るさに感動しました。

不本意な死刑判決を宣告した元裁判官を九州の病院で対面する場面も忘れられません。

再審も検察の面子としか言いようがないほど、長い時間がかかりました。巖さんによって再審公判に臨むひで子さんは「どうぞ弟、巖に真の自由をお与えください」と訴えました。無罪の判決に清々しい笑顔のひで子さんが素敵。私はこんな強くて優しくして明るい女性を知りません。無罪を勝ち取ったのはついこの間。私が観た今年一番の作品です。(樋口みな子)

### 大地の歌を聴いて

ソング・オブ・アース  
マルグレート・オリン監督



製作総指揮は  
ヴィム・ヴェンダース  
とリヴ・ウルマン

舞台は、ノルウェーのオルデダーレンという山岳地帯。そこで暮らしている老夫婦の暮らしを、その娘でありドキュメンタリー作家のマルグレート・オリンが一年かけて撮影しました。

登場するのは監督の両親のみ。監督は声だけ。ひたすらにフィヨルドの四季の風景を映し出す。滝の上からや上空からのカメラ、フィヨルドの風景を撮影するドローンの効果がすごい。ヨルゲンはこの国で最も美しい渓谷。その場に私もいるような気持ちになりました。84歳の父は自身の生い立ちや最愛の妻への思い、そしてこの土地で自然とともに生きてきた何世代にもわたる人々の人生について静かに語る。ノルウェーの四季と共に人生の意味や生と死を考える。人生探求のドキュメンタリーです。

崩れ落ちる氷河や切り立った断崖が生み出す奇跡のパノラマ。夜空に降りてくる七色のオーロラや多様な動物達の生き生きとした姿も捉えます。監督の父は巖しい山をひたすら歩き続けます。その姿がとても尊く思えました。

水、風の音も心地よく癒されました。この1年、夫をはじめとして、身近な人の死をいくつも経験しました。この映画は、死を描いているのではないけれど、こんな大自然に抱かれて、死を迎えるのも悪くはないと思えました。人は自然に帰っていくんだなあと。夫は大好きな星になったと思うと私の気持ちも安らぎました。映像の素晴らしさに心が洗われました。(樋口みな子)

## ドイツ中を旅して 泣いた！笑った！

ぼくとパパ、約束の週末  
マルク・ローテムント監督



10歳のジェイソンは、生まれながらに自閉症です。集団での行動がとて苦手で、ストレスが高まるとキレて大声を出してしまいます。両親は彼の症状を理解して

いますが、学校で好きなサッカーチームを聞かれたことをきっかけに、自分の目でドイツ国内のすべてのチームを現地みて「応援するチームを決める」と言い出して、週末にパパと各地のスタジアムをまわっていくという物語です。ドイツリーグには56チームがあります。ジェイソンのチーム選びのルールがユニークで「何があっても最後まで観戦」「選手は地味なシューズを履いている」「広告が控えめなこと」「ネオナチのサポートは禁止」「残念なマスコットキャラを有するチームは禁止」「環境や持続可能性を重視」など。原発を廃止し、環境保護を大事にしているドイツならではのですね。

ジェイソンは、CO2をまき散らす自動車や飛行機が嫌いです。環境活動家のグレタ・トゥーンベリさんのドキュメンタリーを思い出しました。父との旅はいつも列車です。遠い場所への移動は大変。乗り換えもあります。一度だけ、あまりにも遠いスタジアムでサッカーを観た時、父は翌日の会社に間に合わなくなり、覚悟を決めて退職願いを提出するのです。女性社長は「会社は家族のようなものよ。あなたはここで仕事を続けて。息子さんの事に配慮するから」という場面に感動しました。ジェイソンは、下界の音や風景に心躍らせます。二人の道中は戸惑いもユーモアもあり、時々しか旅に参加できない母と小さな弟も登場。「なんて素敵な家族なんだろう」と思わず嬉し泣きしてしまいました。

サッカーより私は野球が好きですが、スタジアムで好きなチームに熱狂するのは同じ。父はジェイソンの視線で世界を見ることを学び、絆を深めるのです。こだわりが強かったジェイソンが「楽しみには我慢が必要だね」という場面には涙があふれました。

映画は実話で二人は今もスタジアムを巡っていると知りました。エンドロールでは、モデルとなった親子がサッカースタジアムで実際に観戦している映像が映ります。宇宙物理学者になりたいと語るジェイソンの未来が見たい。お薦めです。(樋口みな子)

## 夢を諦めず、音楽の力で壁を乗り越えていく

パリの小さな  
オーケストラ  
マリー＝カステュー・  
マンシヨン＝シャル  
監督



移民の多いパリ郊外で育ったアルジェリア系の少女が指揮者を目指す物語。

2024年パリ五輪で聖火ランナーを務め、閉

会式で国歌演奏を指揮したザイア・ジウアニの実話と知って驚きました。

パリの名門音楽院へ編入が認められた少女が、世界で6%しかいない女性指揮者への夢に挑む。巨匠チェリビダッケに師事し、自らのオーケストラを立ち上げたのがザイア・ジウアニです。

人種、性別(男性社会)、貧富(移民)、タテ社会(権威主義)などなど、主人公・ザイアには様々な壁が立ちはだかります。しかしチェリビダッケから直接指導を受けられるようになったことで、ザイアの音楽人生に希望の灯が点されるのです。チェリビダッケがザイアに注ぐ愛情のさりげない描写が素敵です。差別をしない指導者に出会えたのはザイアの才能があればこそですが、幸運だったと思います。

チェリビダッケは気難しいイメージでしたが、自身の生い立ち、音楽にかける想いを語るシーンなどもあり興味深かったです。ザイアは「奏者との一体感が奇跡を起こす」というチェリビダッケの言葉を信じ、貧富の差がなく、誰もが親しめる交響楽団の結成を仲間や地元呼びかけ実現させるのです。全編に流れる親しみのある曲の演奏が素晴らしかったです。「ロメオとジュリエット」「月光」「ボレロ」などなど。名曲を堪能しました。(樋口みな子)

## 誰からも何もしてもらわへん人なんておらんよ

アイミタガイ  
草野翔吾監督

親友を亡くしたウェディングプランナー、プロポーズになかなか踏み切れず悩む彼、娘を失った両親、ある理由で



ピアノが弾けなくなった高齢女性らの群像劇です。

アイミタガイ(相身互い)という言葉は主人公の祖母から発せられた言葉です。映画では、その意味を問う孫娘に「誰からも何もしてもらわへん人なんて居らんとと思う。気いついてないだけで、いろんな想いが巡って自分のところに届いているんよ」と語ります。「アイミタガイ」の意味を初めて知りました。出てくる登場人物がみんな優しい。いまだき悪人が一人もいないなんてあるの？ 私は、一途に梓(黒木華)を想う澄人が、夫とたった1字違いで、なんだかこの映画に引き合わせてくれたように思えました。

この映画を企画した佐々部清監督は亡くなり、その遺志を継いだ作品だと、解説で知りました。事故で若くして亡くなった叶海の遺志が残された両親や親友を後押ししていくという展開は亡き監督への追悼の思いがこめられているようです。

ラストの歌は黒木華が歌っています。心にしみました。(樋口みな子)

購読料と寄付をありがとうございます(敬称略)9.15~11.23  
岩田ゆり 新井喜美子 高橋雋 仁木由紀江 沼崎勝洋  
片山篤子 高橋精巧 小西恵江子 梅沢俊 花崎皋平(詩集  
「自由創造社会屋ヤポネシアを創ろう」  
購読料と寄付合計28,000円は印刷と送料に使わせていただきます。郵送読者の方は年間(6回)2,000円を郵便振替「銀河通信」02740-7-56535 お願いします。

## 各地から秋のたより

10月15日、北海道南部せたな町にある、砂防ダムのスリット化した「須築(すつき)川」で、上流にサクラマスが遡上して産卵しているのかどうかを確認する「産卵床調査」を地元の方や札幌のパタゴニアのスタッフのみなさんらの応援を得て、行ってきました。



須築川は奥が深く、狩場山への沢登りの登山ルートにもなっていると。ダムの堆砂は上流へと延びており、スリット化後に徐々に下流へと流れ出していますが、この堆砂域の最上端を越えると、溪流の景色は一変し、苔むした巨石の多い、雄々しくも、美しい川が現れました。



スリット化した須築川砂防ダムの上流側堆砂域



砂防ダムの上流側堆砂域のヒグマの足跡

これがこの川の安定した本来の姿なのだと思います、ダムは、川を壊し、川を作り変えてしまうひどいものだと思います。あいにく、正午を過ぎた頃から雨が降り出し、止むなく引き返しましたが、サクラマスの姿と産卵床をいくつか確認できましたので、スリット化した砂防ダムを乗り越えて、上流へと産卵域を拡大していることが確認でき、まずまずの調査でした。

紅葉がはじまった須築川の上流でドローンを使い、4Kビデオで撮影したものから抜き取った静止画です。

(北海道八雲町・稗田一俊)



止まっていました。足尾育ちか遠くから旅をしてきたのか、きれいなチョウです。(前橋市・堀泰雄)

10月14日、栃木県足尾へ行きました。「わたらせ茶屋」へ行ったら賄いの女性たちが玄関前に集まっていた。見るとアサギマダラ(左写真)が

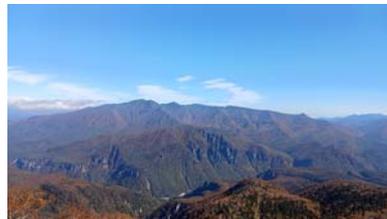
今年最後の通信です。体調が悪く長くパソコンを打てませんでした。2025年分のお振込みをお願いします。振込用紙を同封します。ご寄付を頂いている方にも入っていましたらお許しください。(み)

金木犀が思っていたより木が大きいのにびっくりしています。香りが届かないのが残念です。10月のなかば、そろそろ終わりかな。(立川市・西島順子)



10月16日、札幌市内で観た紫金山・アトラス彗星。肉眼でははっきりみえましたが・・・(札幌市・岩本道治)

## みな子のフォト日記



10月1日、今年最後に登った黒岳。写真は黒岳中腹から見たニセイカウシュッペ山(左)

10月18日、友人に誘われて小さなコンサートを楽しみました。安藤むつみさんのピアノと徳田和可さんのヴァイオリン。

ポーランド映画が好きなことやアウシュヴィッツ博物館に行ったこともあり、コンサート企画の北海道ポーランド文化協会に入会しました。



「銀河通信」読者の皆さまへ

10月28日札幌にある北海道朝鮮初中高級学校へ今年49回目、

皆さまのご協力でご長沼で採れた「平和友好米」500キロと、プリンター機代をお届けする事が出来ました。

この事業を始められた山本玉樹先生も、95歳ですが車イスで参加する事が出来ました。何人かの(私の知らない)方から「銀河通信を読みましたので」と送金頂きました。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。来年は記念すべき50回目です、またご協力頂けたら幸いです。

福原正和(北海道在日朝鮮人の人権を守る会)  
(写真は樋口みな子、転載はご遠慮ください。)